

写真調査によるダム空間の景観構造に関する研究*

Study on the characteristics of the dam scenery by free photography investigation*

井出康郎**・須田清隆***

By Yasuro IDE**・Kiyotaka SUDA***

1. はじめに

本研究の目的は、北海道内のダムを対象にして、上流部や下流部などの立地条件の違いによるダム景観の印象特性と、ダム景観のデザインに重要な視点場や動線等の設計課題について評価することである。

本報告は、写真を用いた調査により既設ダムの事後評価を行い、ダム景観の空間的特性と景観意識について検討を行ったものである。

2. 調査対象

調査対象としては、国定公園内にある山岳ダムとして位置付けられる札内川ダムと観光ルート沿いの里ダムとして位置付けられる二風谷ダムを選定して、ダムの立地条件の違いによるダム景観への印象度を評価した。

表1 調査対象ダム

ダム名称	河川地点	市街地までの距離
札内川ダム	上流,山岳部	中札内村～19km
二風谷ダム	下流,平地部	平取町～5km

3. 調査方法

調査では、無作為に選定したダム来訪者に、使い捨てカメラとアンケート用紙を配布し、ダム空間にある「好きな景観」と「気に入らない景観」の自由撮影後に、カメラと記入用紙を回収する手法を採用している。アンケートは、撮影した景観に対する○×形式の評価と簡単なコメントの記入形式とした。

*キーワード：ダム景観、事後調査、景観意識

**正員,工修,国土交通省北海道開発局留萌開発建設部

(北海道留萌市寿町1丁目, TEL:0164-42-2311,

E-mail: ide-y22aa@hkd.mlit.go.jp)

***正員, (株)ジオスケープ環境デザイン部

(東京都港区北青山2丁目5-8,

TEL:03-5410-2366, FAX03-5410-2367)

表2 調査人数及び収集した景観写真枚数

ダム名称	調査人数	好きな景観 L	気に入らない景観 D	好感度 L/D
札内川ダム	117	642	266	2.4
二風谷ダム	116	451	321	1.4

4. 調査結果

札内川ダムでは、流域住民の利用が多く、ダム自体が興味の中心となっているのに対し、二風谷ダムは、道内全域から訪れた利用者が多く、ダム事業に併せて整備された博物館や資料館が興味の中心となっていた。

二つのダムの集計結果(表2参照)からは、両ダムともに好きな景観の写真数(L)が気に入らない景観の写真数(D)を上回り、好まれる景観対象が多い札内川ダムにおいては、好感度(L/D)も高くなっていた。好まれる景観対象(図1参照)の「湖」、「山並」、「河畔」は、自然景観や自然景観との調和として「雄大」「美しい」等の評価を、またダム堤体は、ダム自体の存在がランドマークや非生活感として「大きい」「すごい」等の評価を得ていた。

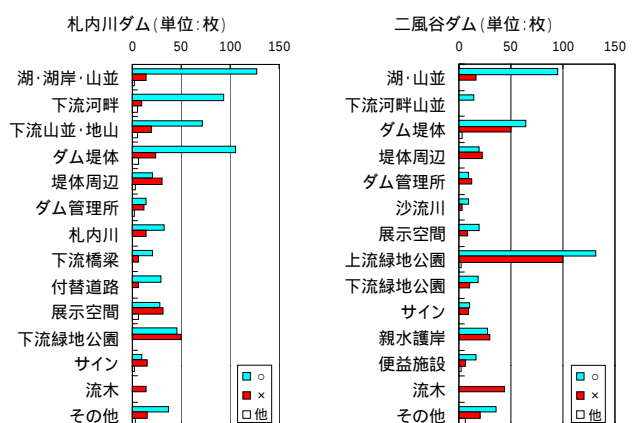


図1 撮影された景観対象の集計

5. 考察

景観の捉え方は、人の感性に依存するところが大きく、その評価において必ずしも多数意見が良いとも言えないところが、定性的評価が難しくしてい

と考える。そのため、調査結果からは、ダム空間にある景観の事後評価から推測される、景観の定性的な捉え方について評価してみた。

(1) 見通し距離が長い視点場からの景観意識

動線上からの景観眺望に際しては、視界が良く、見通し距離が長い位置にある風景が景観対象として意識されている。



札内川ダム (L/D=9.1)

図3 湖への開けた眺望

(2) ダム堤体に対する景観意識

札内川ダムでは下流面が景観対象として捉えられているのに対し、二風谷ダムでは上流面が捉えられていた。札内川ダムの堤体景観は、「大きい」「雄大」等ダムのスーパースケールが好印象に繋がっており、眺望に際しては大きさを実感できる下流側の景観場が活用されていた。一方、二風谷ダムは堤頂部上屋の色や形状等、デザイン的な要素が強調され、ダム堤体の印象度は弱められているため、景観としての評価が分かれていた。



札内川ダム (L/D=14.7) 二風谷ダム (L/D=2.7)

図4 代表的なダム堤体景観

(3) 空間構成と景観要素に対する景観意識

ダム景観は、空間全体の中での構図的な観点で捉えられる場合と、個々の景観要素が捉えられる場合がある。空間構成として捉えられている景観には、広大な湖や雄大なダム堤体等があり、これらの景観は、好印象の評価を得る傾向があった。一方、湖の伐採法面や網場、ダム堤体の減勢工や発電所は独立した個々の景観要素として認識されており、多くの場合「まわりと調和していない」等、周辺景観の阻害要素として低い評価がなされていた。



札内川ダム (L/D=14.7) 札内川ダム (L/D=0.4)

図5 ダムの空間構成(左)と景観要素(右)

(4) 不快要素や不安要素に対する景観意識

ダム空間にある「雨垂れ跡」や「流木」等の状態に対する認知度が高く、不快感や違和感を与える要因になっていた。また、壊れている施設や高さが低い柵等、不安を感じる要素の認知度も高く、施設の適切な維持管理の状態が来訪者の心理的な景観意識に影響することが確認できた。



札内川ダム (L/D=0.0) 二風谷ダム (L/D=0.1)

図6 不快要素の雨垂れ跡(左)と流木(右)

6. まとめ

本調査手法の特徴は、言葉での表現が難しい景観の評価を、写真によって感性情報を収集したことである。また、被験者が認知している景観の言葉と写真による調査方法は、公共施設などの有効な事後評価手法として確認したことである。その結果、ダム空間における景観視点場、構図、要素などと、人の景観意識や認知能力との関連付けから、評価の高い景観構造や印象を阻害している景観要因を把握することができた。今後、ダム事業の情報を蓄積していくと共に、調査で得られたダム景観の知見を、景観が重要になる公共事業にも展開していくつもりである。

参考文献

(1) 井出康郎、須田清隆：「ダム景観に影響する視点場と景観要素に関する実験的研究」、河川技術論文集、2001.06